

東北農政局長賞受賞

「わんどの畑」が合言葉 みんなが笑顔の
「おもてなしの心」満載のむらづくり

なんぶちょうふたまたしゅうらく

受賞者 **南部町二又集落**

あおもりけんさんのへぐんなんぶちょう
(青森県三戸郡南部町)

■ 地域の沿革と概要

二又集落のある南部町は、平成 18 年に南部町、名川町、福地村が合併した町であり、青森県南東部の岩手県との県境に位置している。

その歴史は鎌倉時代まで遡り、源頼朝の平泉・藤原氏追討の際に甲斐国南部郷から従軍した南部三郎光行が築城したのが始まりとされ、南部藩二十万石発祥の地として知られている。

人口は 2 万 1 千人、町の総面積は 155.2k m² であり、その 51.1% が森林、26.9% が農地となっている。

気候は、冬の冷え込みが厳しく、夏はヤマセにより低温となる年もあるが、県内では比較的温暖な地域となっている。

南部町の基幹産業は農業であり、りんごをはじめとする果樹の栽培が盛んで、おうとう、うめ、西洋なし、もも、すももなどは県内一の栽培面積となっている。中でも西洋なしのゼネラル・レクラークは首都圏の高級果物店等で高い評価を受けている。また気象や土地の条件から水田より畑地が多く、果樹のほか野菜の生産が盛んであり、にんにく、食用菊などが特産品として知られている。

第 1 図 位置図



※ 白地図 kenMap の地図画像を編集

第 1 表 地区の概要

事項	内容	
地区の規模	集落	
組織の性格	地縁的な集団	
農家率 (内訳)	46.2 %	
	総世帯数	26 戸
	農家数	12 戸
販売農家数 (内訳)	12 戸	
	専業農家	3 戸
	1 種兼農家	5 戸
	2 種兼農家	4 戸
主要作目 (作付面積等)	水稲	5.9 ha
	果樹	13.4 ha
	野菜	5.3 ha
農用地の状況 (内訳)	耕地計	25.6 ha
	田	6.9 ha
	畑	18.8 ha
	樹園地	0 ha
	耕地率	98.4 %
	農家一戸当たり農用地面積	2.1 ha

流通面では、全国で唯一の町営卸売市場を擁し、町内外で生産された多種多様な農産物が上場されており、地域の多様な農業生産を支えている。

また、観光面では、グリーン・ツーリズムの概念がまだ一般に知られる前から、「さくらんぼ狩り」を通じた交流活動等に地域ぐるみで取り組んでおり、現在は、農業体験を中心とした交流事業である「^{たっしやむら}達者村プロジェクト」に発展させ活動を進めている。プロジェクトには町内の78戸が参画し、修学旅行生など、県内外から多くの来訪者を毎年受け入れている。

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

二又集落は南部町の西端に位置し、集落を構成する26戸のうち12戸が農業を営む小さな山村の農業集落である。

集落の周辺を奥羽山脈の支脈である山々が取り囲んでおり、その傾斜面においては果樹生産、盆地となっている平坦部では水稻栽培が展開されている。

集落の農家は、傾斜地が多く水稻栽培に適した平地が少ないことなどから、農業所得確保のために古くからりんごの栽培を行ってきた。

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

ア 集落を取り巻く課題

二又集落では、古くから集落が一体となって花壇づくりや盆踊り、豊作祈願祭などの活動を続けてきた。しかしながら、高齢化や農業後継者の不足による耕作放棄地の拡大が危惧され、集落環境の維持も心配されるようになった。

また、主力品目であるりんごの価格低迷により農家所得の低下も心配されていたことから、農業経営を改善し、地域が再び活気を取り戻すための方法を模索するようになった。

イ 二又観光農業振興組合と二又中山間組合の設立

農業経営の改善や地域の活性化を図る新たな方策を検討するため、集落内の11戸の農家が集まり、話し合いがもたれた。

当初は、「主要な道路からも遠く、何もない。」という意見が大半を占めたが、農業者の一人が、「ドイツを視察した際、きれいな環境に安らぎを求めて多くの人々が訪れていた」ことを披露したところ、集落にある豊かな自然環境や地域で栽培されている多種類の果樹を「資源」として意識できるようになり、都市住民が安らぎを求めて地域や農園を訪れ交流する「農園マーケット」のような場所づくりに取り組むこととなった。

初めての試みであることから、来園者への対応や地域の魅力に対する不安の

声は多かったものの、平成 14 年 2 月に農家 12 戸で構成する「二又観光農業振興組合」を設立し、観光農園事業を開始した。

また、同年には、「二又中山間組合」も設立し、これまで集落で取り組んできた花壇づくり等の活動に加え、中山間地域等直接支払制度を活用したフラワーロードの整備や、農地維持の活動にも取り組んでいる。

平成 17 年 8 月には「地域の宝さがし」と題したワークショップを行い、子どもから高齢者までの意見を反映した集落のマスタープランを作成し、「活かそうふるさとの自然」をスローガンに、地域の自然や伝統を次世代に継承していく取組を進めている。



写真 1 ワークショップの開催

ウ 「わんどの畑」実行委員会へと発展

平成 14 年に開始した観光農園を核とするグリーン・ツーリズムの取組は、当初は体験方法についての説明不足や、皮をむいたももを素手で触るなどの衛生面での配慮不足があったことから、来園者から沢山の苦情があり落ち込むこともあった。

しかし、なんとしても交流を成功させて地域を活性化したいという強い意志と、果物を食べたときの来園者の笑顔が支えとなり、接客マナーや体験メニューの改善に取り組んだところ、来園者は徐々に増加し、近年では 130 人前後の参加があり、今では南部町でも指折りのイベントとなっている。



写真 2 観光農園での収穫体験

また、観光農園の PR のために開催している消費者交流会では、りんごやももといった果樹だけではなく、地場産の野菜や郷土料理なども提供し、地域文化の情報発信を行っている。

なお、取組を重ねるに従い、観光農園だけでなく他の地域資源も情報発信し、非農家も含めた全戸でむらづくりを盛り上げたいとの意見も出てきたことから、これらの取組を体験型観光農園プロジェクト「わんどの畑」と総称し、集落全戸が参画した取組を進めている。

平成 19 年には二又観光農業振興組合を発展的に解散し、若手からなる「わんどの畑」実行委員会を組織して各種活動を展開している。

(2) むらづくりの推進体制

二又集落のむらづくりは、二又町内会を中心とする以下の団体によって進められている。これらの組織は、そのほとんどの構成員が重複していることから、二又集落においては、それぞれが連携する形ではなく、それぞれの組織に共通する事業として、非農家も含めた住民全員参加によるむらづくりを行っている。

ア ニ又町内会

二又集落の全戸が加入している町内会組織で、生活道路の草刈りや花壇の整備、稲荷神社の祭典の運営等を行っている。

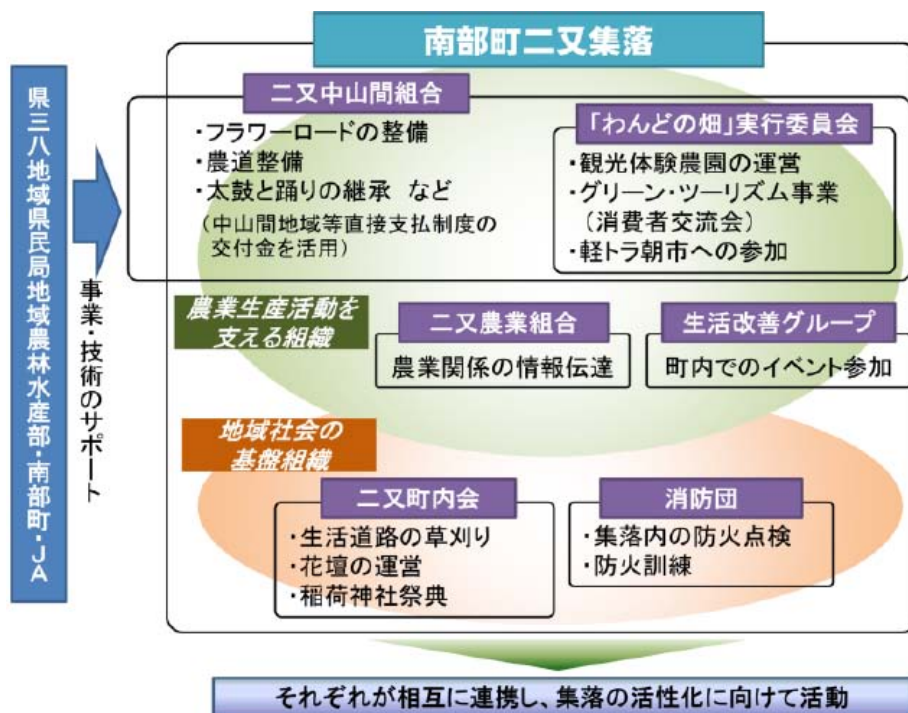
イ 「わんどの畑」実行委員会

平成 14 年に発足した二又観光農業振興組合の後継団体であり、体験型観光農園プロジェクト「わんどの畑」及びグリーン・ツーリズム事業の実施主体として、都市部との交流事業を行っているほか、南部町軽トラ朝市などに参加している。

ウ ニ又中山間組合

中山間地域等直接支払制度の事業実施主体として設立し、むらづくりの中核組織として活動してきた。主な活動としては、フラワーロードの整備や伝統文化の伝承、農道整備などを行っている。

第 2 図 むらづくり推進体制図



エ 生活改善グループ

農村を支える女性の組織として消費者交流会の郷土料理提供部門を担うほか、町全体で行われる事業へ参画している。

オ 二又農業組合

集落で農業を営む世帯が加入しており、農業に関する情報を伝達している。

カ その他連携組織

むらづくりを進めるにあたっては、町役場やＪＡ、県三八^{さんぼち}地域県民局地域農林水産部等と連絡を密にし、必要に応じて支援を受けている。

近年では観光農園の内容充実に向け、県農業普及振興室やＪＡの技術指導により、ももの品種転換を図っている。また、高品質果実の生産に向けた取組として、ネクタリン「スイートピーナス」や西洋なし「ゼネラル・レクラーク」等の導入が行われている。

■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

二又集落のむらづくり活動は、農家・非農家、若年層・高齢層といった職業や年齢の区別のない住民全員参加による取組であり、住民がそれぞれ自らの役割を認識して取り組んでいる。

特に、活動を立ち上げた中高齢層だけでなく、30代を中心とする若い集落構成員にも活動の意義が伝承され、それぞれの世代がそれぞれの役割を果たしてむらづくりに取り組んでいる。

集落の戸数は26戸と少なく、高齢化も進行しているが、その状況の中でも後継者が育成される等、集落全体として活気が戻ってきている。

2. 農業生産面における特徴

ア 多彩な作物と多様な販売ルート

二又集落は山間冷涼地であるため、水稻生産が不安定であることから、経営を安定させるためにりんごを主体とした果樹生産が盛んであった。

しかし、りんごの価格が低迷する中、所得確保と労働力の分散のため、早くからももへの樹種転換を行い、りんごとももの経営に取り組んできた。

さらに、近年では「わんどの畑」実行委員会による観光農園への取組をきっかけとして、ネクタリンやプラム、ブルーベリーなども導入し、多品目の生産が行われるようになってきている。また、消費者との交流の中から、トマトやさやいんげんなどの野菜生産にも力を入れ、栽培面積を徐々に拡大してきている。

流通面では、従来の町内市場やJAへの出荷だけでなく、町内にある直売施設への出荷、消費者との直接取引等へ販路を拡大してきており、とりわけ消費者への宅配は「わんどの畑」の取組を通じて年々その量を増やしている。

これまでの市場流通を主体とした生産活動の中では、消費者の生の声が生産者に届きにくかったが、消費者との交流に取り組むことにより、自分たちの生産物への評価や、食に対する意識の高まりなどを直接肌で感じる機会となり、これがやりがいと自信につながって、生産意欲の向上にも大きな影響を与えている。

イ 生産力向上のための生産基盤の整備等

二又中山間組合では、農業生産基盤の維持も必要と考え、集落住民自らの手で農業生産に必要な農道や水路の整備を行っている。このうち農道は、整備が必要とされるものを集落で検討し、毎年約100mずつ計画的に整備してきたことによって、当面は農業生産に支障をきたすことがない状況まで整備が進んでいる。今後も必要に応じて計画的に整備を続けることとしている。



写真3 集落住民による農道整備

また、高齢となり耕作できなくなった人の田畑を借地することによって耕作放棄地を解消したり、鳥獣害防止活動として爆竹の全戸配布や猟友会へ駆除委託を実施している。

ウ 経営の改善及び後継者の育成・確保の取組

農作物の生育は天候に左右されることから、観光農園の開園期間は年により異なるが、来園者のニーズに対応するため、新たな品種や樹種を導入し、さらには野菜も導入するなど、経営の複合化が推進されたことによって、農産物価格の低下や気象災害等による収入減のリスクが大幅に低減され、経営は総じて安定してきている。

観光農園や消費者交流会等の取組によって農業後継者も育ってきており、とりわけ「わんどの畑」実行委員会は当初50代が中心となっていたが、現在は30代の若手が中心になって活動している。また、このことが影響し、消防団などの地域組織にも若手が新規加入するなど、集落全体としても後継者が育ちつつある。

3. 生活・環境整備面における特徴

ア 住民が一体となった環境整備の取組

観光農園の取組を契機に、外部から訪れる人を気持ち良く迎え入れようとの意識が強くなり、従来から集落内の景観向上のために行ってきた花壇づくりに加え、中山間地域等直接支払制度を活用して集落内を通る道路脇に約 3,500 本のひまわりを植栽して約 500m のフラワーロードとして整備し、新たな農村風景として定着させている。

また、ひまわりの植栽は老若男女を問わず集落住民が一体となって取り組んでおり、地域の豊かな自然環境を守り続ける意識が子ども達に継承されている。

イ 全員参加による趣向を凝らした都市住民との交流

平成 14 年から始まった観光農園事業の P R を目的に、消費者交流会を毎年実施している。当初は、ももの品種を食べ比べたり、郷土料理を提供する内容であったが、近年は野菜などの地場産品や、ももを使った料理教室、楽しみながら農業の知識が身に付くミニクイズ、野菜の詰め放題などが行われ、新しいアイデアによって交流会の内容が充実してきている。また、スタッフ T シャツを作成して集落の一体感を出すなどの工夫も行っている。



写真 4 消費者交流会

この取組は消費者に好評で、リピーターも増えつつあり、農業者のみならず集落住民全員が参加できるイベントとして定着している。

なお、郷土料理の提供では、生活改善グループ員が中心となって地域女性の全員参加を呼びかけていることから、世代間の交流が図られるとともに、女性高齢者の生きがいの場としても機能している。

ウ 伝統文化の復活・継承の取組

以前、二又集落では、集落内にある稲荷神社の祭典として、毎年 9 月 13 日に盆踊り「ナニャドヤラ」が行われていたが、高齢化の進行と人口減少によって、昭和 50 年頃から行われなくなっていた。

集落の代表たちは、集落に昔の賑わいを取り戻すため、住民の心の礎である伝統文化ナニャドヤラ踊りの復活を決意



写真 5 ナニャドヤラ踊り

し、集落の子ども達を中心に踊り手や囃子方の育成を進めてきた。平成 17 年には復活を果たすことができ、現在も継承活動に取り組んでいる。

また、集落内には、煮しめをはじめ、ひつつみ、身欠きにしんと蕨の煮物、きやらぶきの粕和え、なべこだんごといった郷土料理があり、田植えが終わった後に集落の神社にお参りし、春作業の疲れを慰労する豊作祈願祭「天^て祈^のり」や消費者交流会での提供を通して世代間での継承に取り組んでいる。